

本ホームページの利用案内のなかに「ジャンルを超えた日本語短詩の投稿サイト」という一文があります。このジャンルを超えるという点に注目させていただくと、一つには、ジャンルを問わない、という一般的な意味があるでしょう。そして、もう一つには、未知のジャンルをつくりだす、という意味も隠れているかもしれません（この後者こそが、本投稿欄に漂う革命前夜のような熱気の原因だと、個人的に思います）。

では、みなさんの実作の姿勢はどちらでしょうか。おそらく後者への熱を創作の芯にもちつつ、一般的には、前者で捉えていることでしょう。それぞれに、詩、俳句、短歌、川柳、とご自身の作品を捉えて、投稿されているのだと思います。

何がしたいかといいますと、それでいい、ということなのです。まずは、かたち（ジャンル）への意識がなければ、かたちを超えることはできないからです。むしろ、それがないと、だらっとした散文になってしまうかもしれません。だから、新しいものを書こう、とあまり気負わずに、好きなように言葉を追い求めていっていただきたいと思います。新しさや個性はあとからついてくるものです。

一方、選者の私のほうはどう捉えているかという、たとえば、これは俳句だろうとわかっても、そのまま俳句というジャンルにきっちり分けた上で読む、ということはしていません。口語、かつ、短詩型、と広いうつわでキャッチして、読んでいます。さらに自問を深めれば、短詩型ということもそれほど強くは意識していない気がします。ただひたすらに、純粹に、その作品の「面白さ」に注目しています。そういう単純かつ斬新な意識のもちようで、投稿作品を読んでいますので、「ジャンルを超える」という未知の経験をさせてもらっているのは私のほうかもしれません。書くことと読むことは表裏一体ですが、この件についていえば、まずは読み手から超えていく。それを受けて、書き手も超えていく。だからこそ、私は精一杯、みなさんの作品を読んでいきたいと思っています。

それでは、私が入選に選んだかたのなかから、強く印象に残った作品をご紹介します。

源楓香（東京都）「君にだけ壊れるくらい課税して／さよなら僕の総理大臣」

ひろみ（京都府）「戦前と／いつか呼ばれるかもしれぬ日々に／アイスクリーム買い足す」

吉沢美香（宮城県）「雪が降る／楷書のように」

Flim（神奈川県）「天気雨の一粒呑めば／さやさやと／光の風鈴めくのどちんこ」「ペットロスで全部説明できている」

松下誠一（東京都）「自治会の会長による獅子舞を／見るという時間の使い方」「アリバイがあった花から帰らせる」「両ひざにルビをふりたくなる寒さ」

あお（奈良県）「信じるとは、／想像力を働かせないこと／揺れるイオンの3階」

また、今回は惜しくも入選になりませんが、次の方々の作品も忘れがたいです。

杉本太（北海道）「吠えるとき窓の一枚厚すぎる」「千切りに小さい母の声がある」

霧島黒酸塊（新潟県）「ぎょうにんべんに連れて行かれる／人たちを見たことがある」

これからがんばっていきましょう。大いに期待しています。